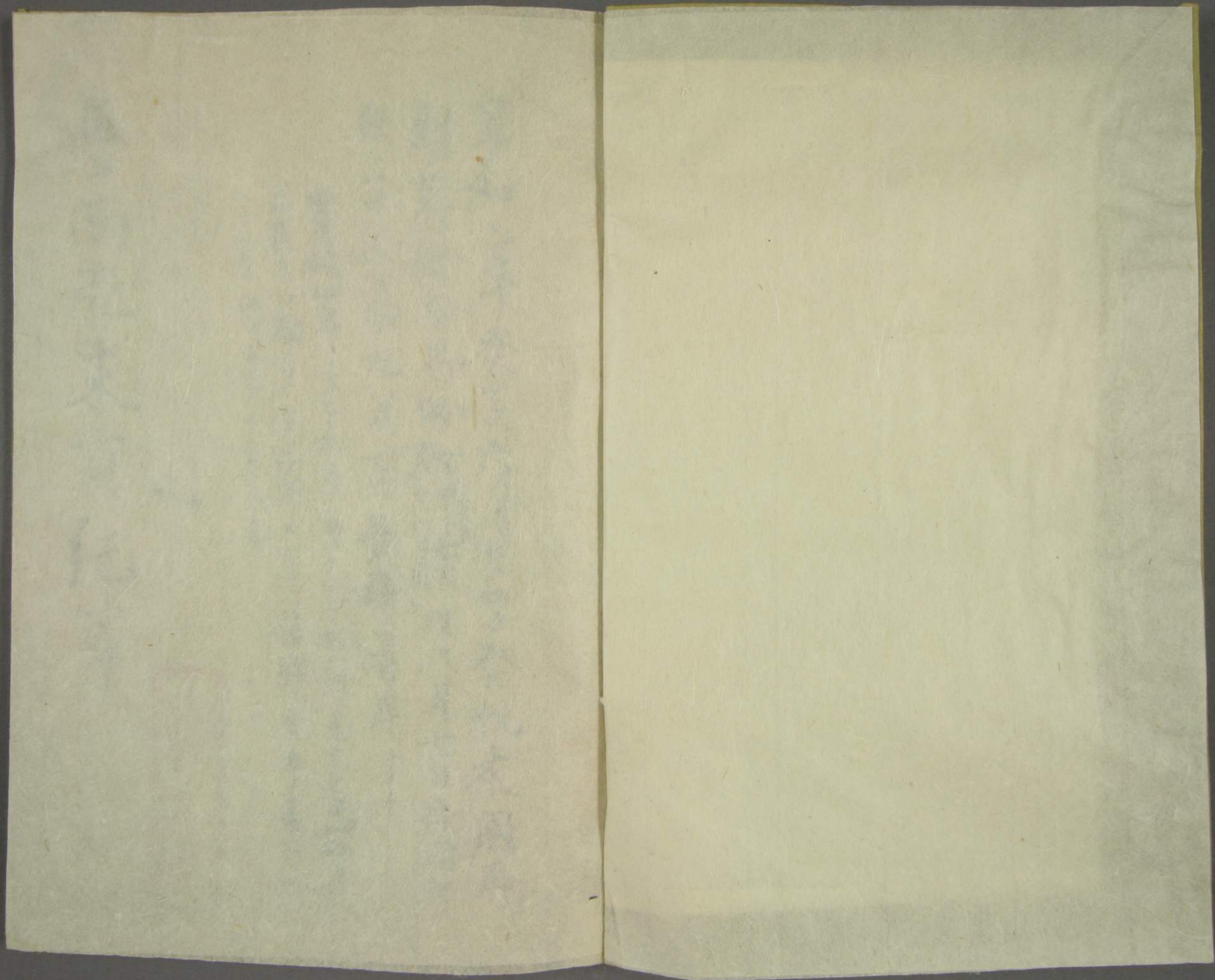


曾西亞來貢紀事

重文
洋学文庫
文庫8
A 65





魯西亞末貢紀事

大觀文庫

享和三年癸亥六月廿四日發帆本國再

到葛模悉昂的加カキ甲子七月カキ以八月七日發同外

強ニ二十三日而九月七日長崎着岸トイフ

宣見政四年壬子九月ウツク勢列カキ先太文亦護送

シ来リシ歳ヨリ十二年メナリ信牌ハ癸丑ノ夏下結ワ
ルヨシ今茲甲子メデ十二年トナリ



通商の和解書と子

今日海商地神の儀を入ルオロシヤ舟
 國王の使節に役人 其とのつと 船匠
 ともしせんしと係中との執たをよる
 オロシヤ船を艘歴教一千八百三年八月
 十一日 享和三亥年 六月廿四日 同和の船仕 テー子マルカニ内
 コッペンハーゲン カナリアの島と南アメリカ洲に
 内 ブラシリア國又今南海を周る 曆教文
 八百四年九月三日 端好時 カムシカツカ
 西り 同六月十日 端好月 同ふの船仕今も

三十一日... 海... 船... 今般使節... 國王... 持... 檢... 使節... 皇... 何... 他... 信...

此れ... 今般使節... 自國... 信義... 日... 年... 口...

皇... 人...

右...

中

通判

三

通判

加

日

石

子

中山

名

今

市

接

別紙

今村

今及... 孫... 交易... 高... 日...

一
 多治し其九師古河方、其源のつゆや
 何
 一
 神南寺河用と云く、不為河系調を仕女に
 けり、右在河用と云く、信守は其に又為高貴
 持後、其も不為河系、此信又、信守は其に
 之年、リユス為、信守は其に、信守は其に
 源多御格別、信守は其に、信守は其に
 信守は其に、信守は其に、信守は其に
 りつ、海人、信守は其に、信守は其に
 信守は其に

一
 南年、信守は其に、信守は其に
 右、信守は其に、信守は其に
 才口、信守は其に、信守は其に
 信守は其に

子丸、信守は其に

大小通約

入
書
三
三

仙基

石巻
酒造人

仙基

三十四

仙基

三十四

仙基

三十四

仙基

三十四

石間郡石巻ノ港リ之即藏元ノ船石巻綱屋平之丞
船頭平多盛之大坂本金買米二千三百四二俵寛政
五年十一月十一日積入同廿七日石巻ヲ出帆シテ
行衛不氣

入

寛政五年十一月廿七日 仙臺船
明三年十一月廿七日 山口船
船中二十人 船名 若多丸 船主
中六人 船主 船主 船主 船主 船主
船主 船主

山口船 船主 去年十一月廿七日 船主
船主 船主 船主 船主 船主 船主
船主 船主 船主 船主 船主 船主
船主 船主 船主 船主 船主 船主

り年 文字 舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主

向子 光 舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主
通 船主 船主

舟

長崎 舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主

あつ 船主 船主 船主 船主 船主 船主

舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主

舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主 船主 船主
舟 船主 船主 船主 船主 船主 船主 船主 船主

私取形質之品常以海者三人體之
持一者三人あつたけり由

私 長二條白のり
横白のり

自其形仙其至其海取石中是清分
出取丸のり積之由

御海米積入人白戸白のり積之十二人
宗出帆之由官家五廿年十一月
十九日船のり一途同日六寅九月十日
船のり一由白のり者私十六人三月私

既并ありて三人あつたけり由四人
お取之由一途のり船のり四人者私
一宗不願米のり者三人あつたけり由

傳たて人
長二條
長三條
長十條

先年一由ありて米一由ありて由
三人あつたけり由
被國女主人のり者三人あつたけり由

船の造り所茶院にありしを多摩川に下りて
由又指し合せしに浦に志守舟に侍る者あり旗
竿等亦武器等取出し海に番船を矢旗識飾り
立て漕出し又綱細より船一艘宛に公儀より舟楫
板も積りて外まこと道具も載せ船に縦横往来
し今や軍始るるに甲斗りに受甲は是を聖七日と
いふ所又聖八日御崎に役船の屋敷にありし海上
に種子一見佐不佐大村の番船の昨日よりも
多くは詠ふおがくく色遠見に忽然として城郭
横にお見ゆるる海に遠鏡あり遠望に伝るる波浪の

船動揺して定りぬる漸り近り至るに陸に能見
中舟を佐不のより陳揚る白地に抱き若荷の故
付たる幕布ニケルお廻し事少敷聖にお見ゆるし
最初矢の突し見ゆるに別方に致るる所
濱に船と懸るありし外に石火矢日星三ヶ所
紺地白紋の佐不の幕布に廻し勿論沖に番
所を昨日の旗幟飾り置甲又十者も物も
ヲ魯西に船能く見ゆるに船に種子少くも
異なり甲の船も種子に化りぬるも
ふくし流年事の船に船にハかりし

船いんの障子しんの八月はちがつの浪なみの打崩うちくずれ
 中なかの船ふねの血色けつしきの市いちの用もちの船ふねの番ばんの船ふねの取とりの困くわん
 三さんの誓ちかの固この仕しのままのよりよりの所ところの回まわのりりの伊いの五ごの外そとの肥ひ
 前まへの筑つくの前まへのよりよりの陳ちんのたたのるるのふふの九くの拾しゅうの三さんの所ところの騙だまの田でんの大だい
 村むらの侯こうの固この小せうの津つの戸この遠とほの見みの番ばんの長ながの崎さきのよりよりの暮くれの行ゆき
 廻まわの都みやこの拾しゅうの五ごの所ところの上うへの身みの為ためのふふのたたの於おの七しちの所ところの船ふねの重おも
 お見みのたたの此こゝの白しろの湯ゆの船ふねの入いのりりの所ところの陳ちんの場ばのここの桃ももの灯とうの軍ぐん
 陳ちんの王わうの再さいの五ごの焚たきのここのののの思おもひひの知しのれれのりりの斗と
 二にの所ところの津つの大だいの平へいの村むらの端はたのここの秋あきの代しろの見みの物ものの所ところの
 是こゝのよりよりの過あやまりりの十九じゅうきゅうの日ひのよりよりのよりよりの所ところの歴れきの中なかの陸りくの

